

特集●感染症の危機管理—関連法規改正後の新たな展開

感染症法の改正について——厚生労働省健康局結核感染症課 山井 理行
 わが国の感染症危機管理がなぜ必要か——富山県衛生研究所 倉田 毅
 国際貿易の自由化と感染症の危機管理—新しい国際保健規則 IHR の意義を求めて

——国際食問題アナリスト 松延 洋平
 改正感染症法に基づく結核対策の課題と展望——国立感染症研究所ハンセン病研究センター 森 亨
 新たな結核対策と感染症危機管理機能の強化—都道府県の立場から—山形県健康福祉部兼衛生研究所 阿彦 忠之
 改正感染症法に基づく新たな取り組み

① 病原微生物等の適正管理の実践——国立感染症研究所バイオセーフティ管理室 杉山 和良
 ② 症候群サーベイランスの意義と実際——国立感染症研究所感染症情報センター 大日 康史

●視点

ランドスケープの変化とこれからの国際協力——WHO 事務局長補(エイズ・結核・マラリア担当官) 中谷比呂樹

●特別寄稿

韓国の敬老堂におけるソーシャルキャピタルと健康——西武文理大学サービス経営学部 斎藤 嘉孝・他

●資料

日本と韓国における小児・青少年の身長・体重の動向

——東京医科歯科大学大学院保健衛生学 望月 好子・佐藤 千史

あとがき

娘が保育園に通っていた頃、お迎えはいつも閉園ぎりぎりで、帰ってからご飯を食べさせお風呂に入れて寝かしつけるだけで精一杯の毎日でした。

家族の協力で何とか回っていた我が家とは対照的に、周りでは共働き家庭でも家事や子育てのほとんどを1人でこなしているママが多いのに驚きました。

仕事や家族の世話で忙しい女性は、自分のケアはおろそかになりがちです。女性の心やからだは日々女性ホルモンの影響を受けていますが、毎月の生理以外でホルモンバランスによる不調を自覚している女性は少ないものです。医療界においても、近年の「女性外来」ブームなどで、改

めて「性差」が認識されるようになってきたところです。

今後、女性の社会進出がさらに進み、共働き家庭がもっと増えれば、働きながら家事や子育てを担う男性も増えていくでしょう。性別役割分担が多様化すれば、患者の性別、年齢、医学的要因のみならず、生活背景や心理状況、社会的環境など、個人の特性を考慮した診療が今まで以上に求められるようになります。

今月の特集号「性差医療から考える—患者の望む医療とは?」が、皆様の今後の保健活動に少しでもお役に立てれば幸いです。

(品川靖子)

公衆衛生(第71巻 第9号) 2007年9月15日発行(毎月1回15日発行)

定価 2,415 円(本体 2,300 円+税 5%) (2007 年々ぎめ予約購読料 28,200 円 ※配送料弊社負担)

発行: 株式会社 医学書院 代表者 金原 優

☎ 113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23

本誌編集室直通 TEL (03) 3817-5718 FAX (03) 3815-7802

販売部直通 TEL (03) 3817-5659・5660 FAX (03) 3815-7804

E-mail: koshu@igaku-shoin.co.jp 振替口座 00170-9-96693 番

印刷所: 三美印刷(株) TEL (03) 3803-3131

広告申込所: (株) 東広社 TEL (03) 3409-8803/デザイン: デザイン・プレイス

・ Published by IGAKU-SHOIN Ltd., 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo

© 2007, Printed in Japan.

・ 本誌に掲載された著作物の複写・複製・転載・翻訳・データベースへの取り込みおよび送信(送信可能化権を含む)に関する許諾権は医学書院が保有しています。

・ **JCLIS** 《創日本著作出版権管理システム委託出版物》

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に《創日本著作出版権管理システム (03-3817-5670)》の許諾を得てください。

・ 医学書院ホームページ <http://www.igaku-shoin.co.jp>

・ 公衆衛生 URL <http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/koshu/>

編集顧問

多田 羅浩三 大阪大学名誉教授・放送大学教授

林 謙治 国立保健医療科学院

編集委員 (50 音順)

阿彦 忠之 山形県健康福祉部・衛生研究所

品川 靖子 東京都杉並区杉並保健所

高島 毛敏雄 大阪大学・社会環境医学

西田 茂樹 福島県衛生研究所

編集室通信

今日は 8 月 9 日、長崎に原爆が落とされた日。昨日「この子たちの夏」という朗読劇を観ました。麦藁帽子を被った 6 人の女優が、史実にのっとり、残された資料をもとに、あの日の子どもたちの姿や、母親の言霊を読み上げます。そこには、1945 年のヒロシマとナガサキの惨状が再現されていて…。短い命を原爆で奪われた子どもたちの、母親の苦しみと絶叫、無念の声が、胸に迫り、張裂けそうでした。そして同時に、今現在つづがなく穏やかに平凡に暮らせているありがたさに、感謝の気持ちがわいてきます。戦争は、人間の地獄で、理屈抜きにいやです。人間である限り、誰一人として、経験してはならない。誰にも、経験させたくない。いつも 8 月には、戦争を思います。(野中)

(担当/野中・天野)